結核予防会創立70周年を迎えるにあたって（1）

結核予防会　会長　**青木 正和**

1．はじめに

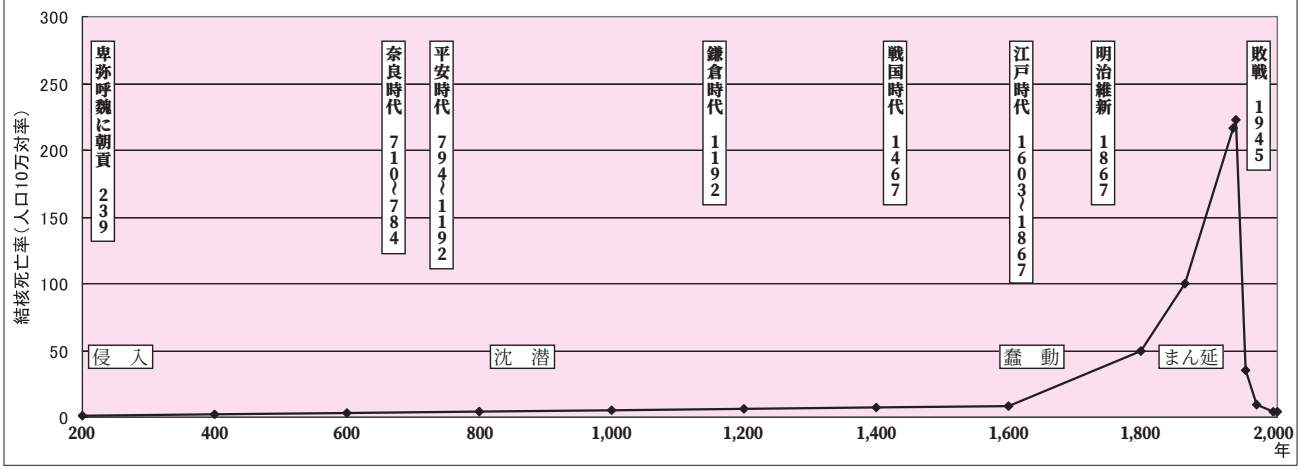
結核予防会は来年創立70周年を迎える。人で言えばほぼ一生に当たる長い年月である。この機会に，今までの70年は結核流行の歴史の中でどんな時代だったのか，これにどう対応したかを簡単に振り返り，今後のあり方を考えてみることも有意義なことであろう。勿論これは，組織を挙げて検討すべき問題であり，直接の関係者だけでなく，広く国民の理解が得られる結論を出すべき問題であるが，その一つの資料として結核予防会で長く仕事を続けてきた筆者の感想を述べてみたいと思う。

2．わが国の結核の歴史の中の70年

ドイツのハイデルベルクで発掘された約9,000年前の人骨の第４，第５胸椎に結核カリエスの痕が認められ，エジプト先王朝時代（紀元前6,500～5,100）のアダマイ遺跡で発掘された女性に脊椎カリエスが発見されているので「結核は人類と共に古くからあった」と言われる。わが国ではおよそ1,800年前の鳥取県の青谷上寺（あおやかみじ）地遺跡の人骨に発見された結核性変化が最も古い結核の痕跡なので，結核菌はその頃大陸からの渡来人によってもたらされたと考えられている。

しかし当時の日本は人口稀薄な農業または狩猟国だったので，結核は広くは拡がらなかった。結核菌が少しずつ蠢動を始めたのは江戸時代からで，本当の流行は明治の産業革命と共に始まった。巨視的に見れば結核菌がわが国に侵入してから今日までの1,800年の結核流行は**図１**のように表わせるだろう。江戸時代前は殆どX軸に重なった低い値が続き，江戸時代からの左裾は極めて長くゆっくりと上昇し，明治の急激な上昇と結びついたものと思われる。まん延は産業革命と共に始まった最近の約120年のことなのである。

図１　わが国の1800年の結核まん延の概念図　（ただし、1900年～2006年データ以外はイメージ）



今年は「明治」で表わせば「明治140年」にあたる。**図２**の1880年以前の結核死亡率は以後の傾向線から推測したものであるが，こうしてみると結核予防会が活動してきたこの70年は，わが国で結核が本格的に流行した140年間の丁度半分に当たることが分かろう。

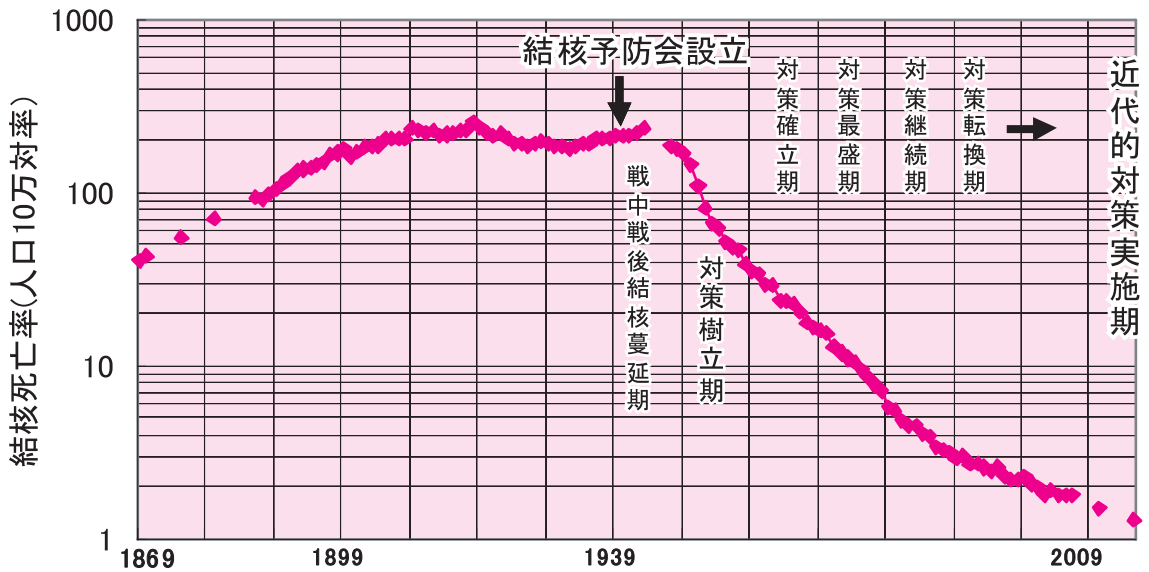
結核予防会が創立された当時は，近代国家建設，あるいは，富国強兵政策の結果，結核は都市でも農村でも手がつけられない程広く蔓延していた。結核死亡率は20歳代の男では10万対562.6，女でも

375.4という惨憺（さんたん）たる状態であった。結核対策の強化は国にとって至上の要請だったのである。

それから70年，結核死亡率は10万対216.3から1.8に下がった。図から明らかなように，わが国の結核まん延が高い山を画いた140年間の丁度半分の時期を，結核予防会は夢中で働いてきたわけである。

勿論この70年間には，社会・経済・政治的に大きな変動があり，医学は大きく発展した。予防会が設立された頃は，丁度，X線集団健診やBCG接種が実用に供される時であり，設立後10数年で化学療法も可能になった。これらをフルに使い，国を挙げて結核に立ち向かい，世界で最も早い速度で結核を見事に抑え込んできた70年だったのである。

図2　わが国の140年間の結核死亡率の推移



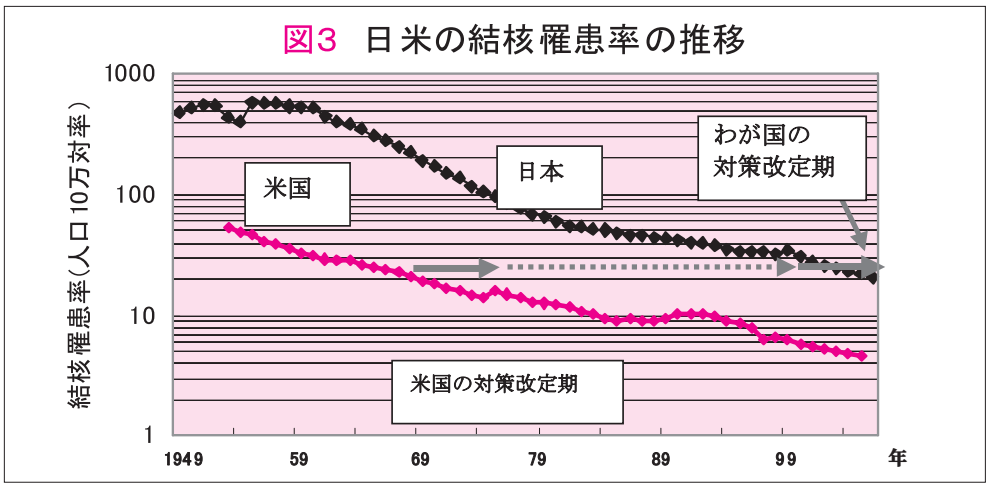
3．今こそ大事な変革期

結核死亡率は今では10万対2を割り，結核流行の山が終わったように見える。しかし，罹患率は2006年にも10万対20.6で，根絶には程遠い。わが国の結核罹患率が明らかにされている1949（昭和24）年から今日までの罹患率の推移を米国と比較すると**図3**のとおりである。米国が現在の日本程度の罹患率に到達したのは1969（昭和44）年頃である。そして，まさにその頃から約10年間をかけて，米国は伝統的に実施してきた結核対策を大きく改め，まん延状況と結核病学の進歩に対応した歴史的な転換を図ったのである。主な転換は次の3点である。

① 結核患者の一般病室への収容（結核療養所の閉鎖）
② 一般住民の結核発見のための胸部X線検診の廃止（有症状受診の促進）
③ 潜在性結核感染者治療の整備（リスク・マネージメントと化学予防による発病防止）

その後，米国では結核の逆転上昇，多剤耐性結核の院内感染の多発，移民・難民の結核の増加，HIV感染結核の増加などさまざまな問題が発生し，その度に目まぐるしく対応してきた。

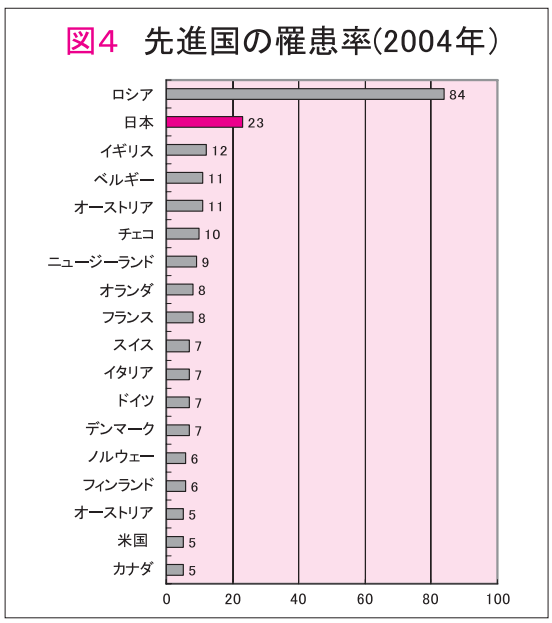
結核罹患率が10万対20といっても，わが国と米国では内容が大きく違う。わが国では高齢者の割合が圧倒的に大きいし，米国では黒人，ヒスパニック，移民・難民の結核の問題を無視できない。結核対策は米国では州の自治に任されている部分が大きいし，わが国では一つの法律で均一に行われている。医療制度も大きく違っている。従って罹患率が10万対20になったからといって米国を真似て対策を急に変える必要はない。しかし，今後も罹患率が徐々に減少し，地域によっては間もなく10万対10を割ることを考えれば，改めるべき対策は少なくないと考えられる。ヨーロッパ諸国も同様の変換を遂げたのである。

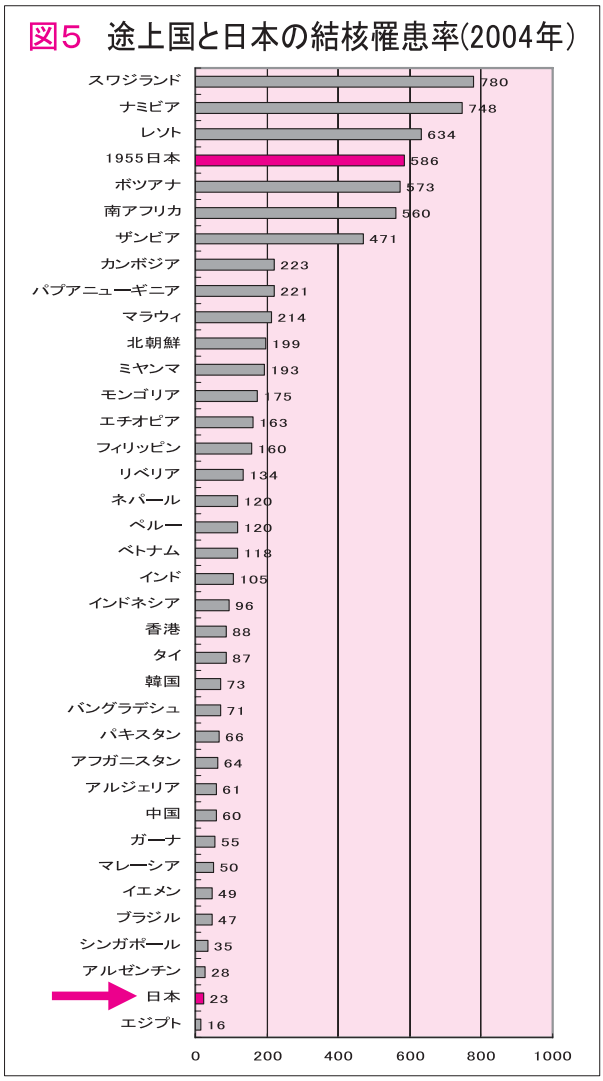


4．世界の中でのわが国の位置

わが国の結核の状況を一言で説明する時，よく言われるのが「先進国で最下位」ということである。誠にそのとおりで，**図4**に見るように段違いに高率なロシアを除けば日本は最下位であり，しかも先進国として普通頭に浮かぶ国々の２倍から４倍以上も高率である。米国やカナダと較べれば約40年遅れている。

しかし，**図5**を見て欲しい。日本と比較的関係が深い途上国の罹患率を示したが，わが国の罹患率は群を抜いて低い。**図5**には今から約50年前の1955年の日本の罹患率も示したが，当時のわが国の結核まん延状況は現在の多くの途上国よりずっと悪かったのである。1939年に結核予防会が創立され，1951年に結核予防法が大改定され，国民を挙げて努力をしてきた結果今日の状況となったのである。



先進国で最下位ということは大きな問題であるが，戦後，世界に類を見ないスピードで結核を減らし今日に至っていることも忘れてはならない。

次号では，こうして迎えた現在のわが国の結核の疫学的特徴について述べたい。